

## コロナ後遺症の嗅覚・味覚障害はどう治療するのか？ 医大教授が4つの治療法を解説

2022年5月11日日刊ゲンダイ



コロナ治癒後も嗅覚・味覚障害が続くケースも (C) PIXTA

新型コロナウイルスでは、治った後も嗅覚・味覚障害が続くケースが多数報告されている。金沢医科大学医学部耳鼻咽喉科学・三輪高喜教授に話を聞いた。

現在のオミクロン株では咽頭痛が症状の多数を占め、嗅覚・味覚障害は減っている。

「先日発表されたランセット（世界的権威のある医学誌）によると、デルタ株では嗅覚の喪失が60%程度だったのが、オミクロン株では17%と、3分の1まで減少。では、オミクロン株では嗅覚障害に悩む人が減少しているのかというと、感染力が強いオミクロン株では感染者数がかなり多いです

から、嗅覚・味覚障害に悩んでいる人が減っているとは言えないでしょう」

日本での嗅覚・味覚障害の発生頻度と予後は十分に知られていなかったが、三輪教授らは昨年、厚労省の要請で、日本での嗅覚・味覚障害について調査を行った。

20～59歳の感染者に、療養中と発症後1カ月の2回、症状のアンケートと嗅覚・味覚検査を実施。アンケート回答者251人、検査実施者119人のうち、57%に嗅覚障害、40%に味覚障害が認められ、うち37%は嗅覚・味覚双方の障害があり、味覚障害だけの人はわずか4%だった。

「嗅覚障害ありと回答した人のほとんどが嗅覚検査でも低値でしたが、味覚障害ありと回答した人はほとんどが味覚検査では正常値でした。このことから、嗅覚障害により風味が変わるため、味覚障害を自覚していると考えられます」

コロナによる嗅覚・味覚障害を訴える患者が来院した場合、三輪教授が行う検査は、内視鏡、CT、嗅覚検査、味覚検査。

「発症1カ月以内なら、鼻の奥の炎症が原因で嗅覚障害が起こっている可能性が高い。炎症の場所によっては内視鏡だけではわかりづらいため、その場合はCTスキャンもします。ただし発症して2週間以内は、感染拡大のリスクがあり、内視鏡などはできません」

### ■欧州では嗅覚刺激療法がガイドラインに掲載

現段階ではコロナの嗅覚・味覚障害に対してエビデンスのある治療法が確立されていない。そこで炎症が確認できたら、「嗅覚障害診療ガイドライン2017」の鼻の炎症がある場合の治療法に準じて、ステロイドの局所投与が検討される。

発症から1カ月超なら、ウイルスが嗅神経（においを感知する神経）を破壊したことによる嗅神経性の障害が疑われる。やはり「嗅覚障害診療ガイドライン2017」に準じて、漢方薬の当帰芍薬散や、神経修復機能のあるビタミンB12製剤を使う。

また、味覚障害がある人には亜鉛製剤を投与する。

「実は海外では唯一、嗅神経性の嗅覚障害にコンセンサスを得た治療法があります。ヨーロッパで広く行われている嗅覚刺激療法で、4種類のおいさを1日2回15秒ずつかく。イギリスではコロナによる嗅覚障害のガイドラインにも掲載されています。ただ、4種類の

においの中には日本人に馴染みが薄いものもあり、別のにおいに置き換えて欧州と同様の結果が出るか、現在臨床研究中です」

繰り返しになるが、コロナ治癒後も続く症状に対して、エビデンスのある治療法は確立されていない。

コロナ後遺症外来などでさまざまな治療が試みられているものの、三輪教授は「嗅覚障害に関しては、ステロイド、漢方薬、ビタミン製剤、味覚障害には亜鉛。これが現在改善の可能性を持つ治療法と考えています」と話す。

嗅覚・味覚障害で受診する場合は、嗅覚検査、味覚検査ができる耳鼻咽喉科が望ましい。

「破壊された嗅神経が修復されるには時間がかかります。月単位で少しずつ改善していくため、本人は自覚しづらい。私は3カ月おきくらいに嗅覚・味覚検査を行い、改善度を患者さんに示しています。それが治療のモチベーションにつながるからです」

改善のスピードはゆっくりではあるが、多くの患者さんはよくなり最終的には嗅覚・味覚を取り戻す。希望を捨てずに治療に取り組みたい。